

教育雑感

子どもが問題行動を起せば「自己肯定感が低いから」と、原因をこの特性が不足していることに帰する。学校ではよく見かける光景である。

研究の世界では、「自己肯定感」とほぼ

同じ意味で「自尊感情」という言葉が使われる。実はこの自尊感情は、一般に考えられているほど良いものではない。近年の研究によると、健康にも対人行動にも、それに学業面にも良い結果をもたらさない。逆に、悪化させるというデータもあるほどだ。

これでは、自尊心は高めるものではない

く、低めるものに成り下がってしまう。それでは困るということ、多くの研究者が自尊感情の概念を見直し始めた。その結果、自尊感情の概念が2分されることになった。

私もその見直しを行った研究者の一人で、自律と他律の違いによ

「自己肯定感」の謎？謎？

る新分類を独自に提起した。これまでの自尊感情は、他者との優劣に敏感な、問題のある他律的自尊感情になる。自律的自尊感情こそが、子どもを守り育てる。この健全な自尊感情は、自分への信頼、他者への信頼、内からのやる気がそろう踏みした複合性格である。

ところで、近年の脳科学や心理学が、人の営みの9割ほどは無意識で決定される、と究明したことをご存じだろうか。実は、自律的自尊感情も無意識界で威力を発揮し、それを測るにも質問紙など意識を介した方法では太刀打ちできない。

年前から、本当の自尊感情が何で、どう測り、どう教育すべきなのかを、学会や論文などを通じて研究界で公表し始めた。同時に教育界でも、間違いを正す説明を始めた。道徳でも人権教育でも旧来の自尊感情が愛でられ、教育対象とされ続ける。

そして精査を重ねると、学校でこれまでに良かれと育成してきた自尊感情は、軒並み問題がある他律的な自尊感情になった。概念も測定法も育成方法もすべて刷新し、安易に「自己肯定感が低いから」と言わせない学校教育の見直しを迫られる。私たちは先を急ぎ数

その教育方法も出来上がっていて、複数の学年で実践する学校も全国に広がっている。いかに教員が多忙とはいえ、事は子どもの健康と至福にかかわる重大事である。何をにおいても、自尊感情の考え方も、教育活動を変えてもらうしかない。

半ば常識とされる自尊感情の効用を前に、私たちの活動の前に立ちはかかる壁は大きい。語り説くだけでは、学校教員も戸惑うばかりだろう。そこで、実際の手立ても考えている。非意識で測る必要がある自律的自尊感情の簡単な測定方法は開発済みである。そして、

自律的自尊感情は、「幸せになる心」の中核を担う。科学的根拠をもって進めるこの自尊感情の刷新に耳を傾けてほしい。折しもこの8月末には、この内容を詳しく平易に紹介した拙著も福村出版より上梓する。研究界はもとより、教育界、社会全般へと自尊感情の真実を伝えたい。(山崎勝之・鳴門教育大学予防教育科学センター所長)